



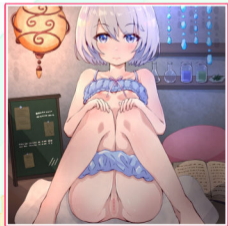
リル (リル・エリクシル)

将来の夢は、魔道具屋さん。

亡き両親に代わり、自分を育ててくれたプレイヤーをお師匠様と慕い、恋心を抱いている。

知的好奇心が強く、自らダンジョンに潜ることも…

お師匠様とのえっちを妄想して、一人でシちゃうそんなお年頃。



「ねえ、お師匠様」

「わたし、おつきくなったら、お師匠様と結婚するの。」

「お師匠様は、何でも教えてくれるけど、

お料理もお掃除も苦手でしょうっ」

「だから、わたしが身の回りのお世話をしてみせるの。」

その無邪気さに答えるように、小さな頭を優しくなでる。

「リルが立派な魔道具屋さんになったらね」

淡い記憶が柔らかい光と微かな風の音に溶けていく。

目を覚ますと、扉の向こうから、
聞き馴染みのある声がした。

「おはようございます、お師匠様。
少しよろしいですか？」



緊張しているのか、その声からは、
少しの震えが伝わってきた。

身なりをして、扉を開け、彼女を部屋に招き入れる。

「お久しぶりです。
それで、どうしてこちらに？」

昨夜、近くの森の調査依頼を受け、俺はこの村を訪れた。

駆け込んだ宿の受付が、
かつての愛弟子というのは、驚きた。

俺は、経緯を簡単に説明して、質問を返す。

「君の方こそ、どうしてこんな事〜」



ここから、西にある

小さいが賑やかな街で、彼女は育った。

彼女の亡き両親の書に従い、

彼女に生きる術を教えたのは、俺だ。

その時、彼女は両親が愛したあの店、

魔道具屋を継ぎたがっていた。

そんな、彼女が何故ここに居るのか不思議に思い、尋ねた。

「お師匠様が私の元を去ってから、
母の日記が出てきました。」

「そこには私の知らないことが、
たくさん記されていました。」



「父と共に旅をして、
多くの仲間やお師匠様に出会ったこと
街から街へ渡り歩き、
魔道具や商売について学んだこと」

「それを読んで、
外の世界を見てみたいと思っただけです。」

なるほど、彼女らしい答えだった。

「それで、今はこの村で簡単な依頼を受けて生活しています。この貸し宿の管理も、そのうちの1つなんですよ。」

ドドドド、

こちらに笑顔を向けて、彼女は続ける。

「お師匠様も、しばらく、

この村に滞在されるのでしたら

部屋に空きもありますし、

ここに住まわれては、いかがですか？」

少し迷ったが、弟子の提案を受け入れることにした。

「ああ、迷惑しなければ」



再び、リルと通りすれようかとなって、
半月ほどたったある夜

俺は月明かりと共に扉の隙間から漏れる、
その情景に目を奪われていた。



「んっ……あっ、はぁ……
お師匠様……ふぁ、んっ……」

細長い指を秘所に這わせ、
独り、蕩けた顔を見せる愛弟子の姿
その愛らしい唇から、
時折、漏れる自分の名に息を呑む。

リルの方も、快楽に夢中と
いった様子で、嬌声を上げてる。

「んっ……あぁん……」

お師匠様……だめてす……」

近づく絶頂に、手の動きが、
喘ぎ声が、次第に大きくなっていく。

俺のモノも、いつ暴発してもおかしくない状況だった。

—ギイイイイ

2人を取り巻く火照る様な空気が、
一瞬にして凍り付く。



床の一部が古くなり、ギシギシと鳴る廊下を二匹の猫が歩いている。

「チヨコなの？
ね、そうでしょ？」

何かに縋るような小さな小ぶりを声でリッパが響かぬ。

ほんの数秒がとても長く感じられた。



——にゃー

廊下の奥で、猫が鳴く。

リルは、ホツとした様子で、息をついた。



それからとれくらいたったか。
未だ、俺はリルの部屋の前にいた。

「ん、んっ……あっ……
んあ……さま……お師匠様あ……」

チヨコの来訪で、焦らされたリルの体は、
絶頂を求めて止まらず。



「ひゃ……んっ……
そこ……らめえ……」

蕩け切った声の合間に、
びちゃびちゃという水音が湿じり始める。

「お師匠様も……わたし、もう……
中に……くちひゃい……」

愛弟子の淫ちに狂う姿に、
俺も限界に近いのを感じていた。

「んんん……
んんん……んん……」



しなやかに伸びた指が、
赤みを帯びた秘所に飲まれては、吐き出される。

それを俺のモノだと思って、
シてくれている。

そう考えたのと、俺も言われぬ、満足感が込み上げてくる。



「はっ、へっ、へっ………
ダメだ………
「………
………」



「んっ、あ……

お師匠様も……

お師匠様も……わたし……

もう……いっちゃんです、

あぁあっ……

ちゅえ……

ふぁぁ……

いっ……いっ……いっ……

「……………」

「はぁはぁ……」

静寂を取り戻した部屋の中で、
荒い息遣いが木霊する。

俺は、汚してしまった床を
ハンカチで拭い、自らの装いを正す。

そして、その場を離れようと立ち上がり、
最後に部屋を一瞥した時だった。

——カアアアア

2人の視線が重なり、
絶頂の余韻に浸っていた
リルの顔が真っ赤に染まる。

「あの、あの……
お師匠様……
えっと、その……
これは、違くてすね……」

と、今にも泣き出しそう顔で、
慌てながら、必死に体裁を取り繕っている。

その姿が、どうしようもなく、愛おしく感じられる。

そして、気が付けば、
俺は彼女に駆け寄り、抱きしめていた。

——少しの間、俺の腕の中で、
じっとしてらたリルが口をひらく。

「あの……お師匠様……
もう大丈夫です……落ち着きましたから……」

そう言って、こちらを見つめる
大きな瞳には、決意の色が見て取れた。

「お師匠様、わたし、
お師匠様のことが……好き……です……
今も……その……お師匠様のことを
想って……シていました……」

後半は、言わなくても思ったが、
今は、それすらも愛おしい。

「俺も……ずっと……
君のことが……だが……
君の両親に申し訳が立たないと……
一度は、君から逃げた。」

未だに俺は――

「お師匠様は……まじめ過ぎます。」

リルが、未だに答えを出せずにいる俺に言う。

「初めて会った時のこと、覚えていませんか？」



「母は、まだ幼い私に、お師匠様のことを将来の旦那様だよって父も、お転婆娘には、もったいない男だって、笑っていました。」

リルが、未だに答えを出せずにいる俺に言う。

「良く思っていないなら、そんなこと冗談でも言いませんよ。」

その通りだと思う。
と、同時に気持ちちは、自然と言葉になった。

「こんな不甲斐ない男だが、俺と一緒にしてくれるか？」

——んっ

俺が喉を鳴らし、リルの髪を撫てると、
何かを察したように彼女は、
静かに目を瞑り、可愛らしい口元を尖らせた。

俺は、せりり距離を詰め、
ぞっぞっ胸を揺らせせる。

「んーちゅ……
んっ……」



ただ重ね合うだけの、優しいくちづけ

甘い香りが漂い、柔らかい感触が伝わる。

唇が離れては、
また、すぐに求め合う。

「ん……ちゅ……んっ、
にゅる……んんっ？……」

何度か繰り返した後、俺は、
リルの口元に自分の舌を這わせた。

リルの方は、
まだ恥じらいがあるようで、
唇にきゅっと力が入る。

それを無理に
こじ開けることはせず、
緊張が緩むのを待った。

「……………」
「ささむら……ささむら……」

しばらくすると、
リルの舌が控えめに俺を誘う。

それを合図と捉え、
今度は少しばかり
強引に舌をねじ込んだ。


「ちゅぶっ……ちゅるる……
れる……んっ……ちゅば……
あっ……んんっ……ぶはっ……
はあはあ………」

俺は、息継ぎを忘れるほど、
熱心に舌を絡ませる。

リルも、もう何の抵抗もない様子で、
目をとろんとさせている。

「……お師匠様……
あの……そろそろ………」

俺の服の袖を掴み、もじもじと
リルにつられて、視線を落とす。



自慰の後に敏感になっていたのか、
俺とのキスで感じてくれたのか
彼女の秘部から溢れる愛液が、
滴り落ちてはシーツを濡ませている。

俺の方も、一度抜いた後とは言え、
愛弟子のそんな状態を見せられては
流石に欲望を隠し切れず、
いつになく、愚息をいきり立たせていた。


俺は、大きくなったそれを取り出し、
彼女の小さな割れ目に沿わせる。

愛液が十分に馴染むように、
それを擦り付け、そして、入り口に宛がう。

「それじゃあ……挿入れるよ……」

リルは、畏まって、答える。

「……………はい……………」
「……………お願いします……………」



俺たちは、座ったまま
抱き合っていたらして、繋がった。

——っ——

俺は、リルの顔が破瓜の痛みに
歪むのを見て、少し躊躇する。

リルは、涙で腫を潤ませながらも、
笑顔を作って俺に言う。

「……お師匠様……
わたしなら……
大丈夫ですから……
……その……
続けてください……」

俺は、それに答えるように、
出来る限り優しく続ける。

「……んっ……腰を浮かせて……
やっぴりっ……んっ……」

入回から中腹までを
何度か往復した時だった。

「……んっ
はう……んぐっ……」

おしりや股を当て沈むとッて、
シーンの痛みが赤が混じる。

「……………」

意を決して、腰を落としたリルの中に、
俺のモノが一気に飲み込まれる。

「お師匠様が……私の中……
奥まで……まきてる……
……あっ……ん……
なにこれ……へんなかんじ……
……でも、すごく幸せ……です……」

快楽が痛みを和らげ始めたのか、
リルの表情が緩んでいく。

それとは対照的に、
膣の締め付けは強まり、
俺の陰茎に絡みついてくる。

その感触に、理性は徐々に薄れていき、
律動が自然に速度を帯びていく。

「……………あんっ……………お師匠様も……………
はぁ……………んっ……………」

リルも気持ちいい場所を探るように、
自分で腰を動かし始めている。

そのぎこちなさが却って、
いい刺激となり、射精感を誘発する。

しかし、先ほど抜いたのが幸いして、
果てるまでには至らない。

「……んっ……………あっ……………
んううう……………はううう……………」

これまでとは、明らかに違う
艶っぽい声が、リルの口から洩れる。

「……………あっ……………んっ……………
お師匠様……………お師匠様あ……………
わたし……………もう……………
……………もう、イっちゃいそう……………
です……………」

——のびのびと……
おんや……ズンズン——

激しくなる2人の動き、
飛び散る水滴、
ギシギシとヘッドが軋む。

「……………おん……………」
……………おん……………」

「……お腹の中……
お師匠様ので……いっぱい……」

恥ずかしげもなく、
そんなことを口にするリル。

俺は、その前髪を掻き分けると、
おでこにそっとキスをした。